

次に理教といふのは、眞實は、そのまゝあらはれ  
いでむしろ反對の方にあらはれることもある。水面  
にうつた月は、その實大空に輝いてゐるのであ  
る。眞如のやうな月は、水面にうつたものではな  
いのである。人情ものに出てくる勘當のもさう  
だ。勘當する眞實の親心は、怒つてゐる形相の  
うちにあるのではない。同様に、あのいかめしい不  
動尊のお姿は、人間をおどすためではなくして、  
衆生を愛する慈悲の心こそ眞實である。  
世の中でも冷淡の半面に又、温い情は流れ、そこ  
にこそみんなが眞實に求める世界があるのである。  
互相といふのは、物を對立のうゑに眞實をあらは  
すといふのである。  
静けさといふのは、音のない世界であらう。處が、  
その實、吾々にとつては小夜更けの静けさは、木枯

の吹く音に寧ろより深い静寂味を感じる。かくて  
醜のうちに美があり、煩惱のうちに菩提がある。氷  
多きに水多し、障多きに徳多しといふのは、否定  
することの出來ぬ事實である。煩惱即菩提の教は  
こゝに生れる。惱みのないところに救ひはない。惱  
みの世界に救ひがある。子を想へばこそ親心があり、  
親心があつて子心がある。走らさうとして駁者は鞭  
をうつののである。あゝ人生は無常だ。こゝに常住  
を欣ぶこゝろがわき、こゝに救ひの道がある。眞  
實はかく相對するものゝ上に示現してゐる。  
けれども、この三つの形式のうちに物は全て眞實  
をあらはしてゐるかといふとさうではない。龍樹  
の「空」の思想は、何のとらへるところもない分別  
を超越した世界に眞實を求めた。即ち全てのものに  
把はれないのである。把はれないとき、眞實は、全

てのものゝうゑに又表現してゐる、櫻の花が、あは  
たゞしく散つてゆく、そこにも眞實はある。くちな  
い名畫の上にも亦眞實はあふれてゐる。  
一片の字の上にも親の眞實があると共に怒れる相の  
裏にも、親はある、共に親の眞實である。  
龍樹はかくて、いろ／＼な方面に、その途をと  
いたのであるが（この四つの見方は、後世のことた  
が——）易行道といふのは、丁度、舶につて大  
海を渡らうとするやうな道である。山を越え野をこ  
え、陸路を辿つてむかふに行く道もあるが、そこを  
船でゆかうとするのである。  
龍樹の思想の一面は多神教であるやうにもみえ  
る。  
多くの佛や聖者たちに恭敬されてゐる。然しそ  
の反面かれの立場は「空」の本性をうちに存して

あることを忘れることは出來ない。  
即ち法性は空でありそこにのみ眞實がある。  
この空を悟つた即ち「人」と「法」とが不二となつ  
た世界が眞實である。  
この眞實の體驗の世界は、説明されるべきもので  
はない。いかなる言辭も之を表示することは出來な  
い。之を知る道、それが難行道である。  
山にかくれ、苦行をつゞけ、觀念を凝らして知り  
得るのである。  
しかし凡夫には、それが及ばない。而て又、眞實  
は、全てのものゝ上にあらはれるべきである。こゝ  
に多神教的思想が生れる。  
それが統一され一の法界の綜合的地位を占め  
るものとしてあらはれたのが、無量壽佛である。  
即ち空の本性は、信の對象として、一切の法

を統べるところの無量壽佛として展開する。

その無量壽佛の救ひの法は「信方便易行」となつて表明された。

佛名を稱念するところに、佛を見たてまつるのである。「佛をみたてまつる」は、しかし眼識の對象としてないことは明かである。

無量壽佛の光明のなかに攝取されるところに、稱ふる我も、稱へられる佛も對立しない人法不立の世界を示現するのである。

この「稱ふること」「信すること」「念すること」の問題は、かなりむつかしく、そこにいろいろ救ひの道が岐れてくるのであるが、龍樹そのものを中心として考へるときは、佛名を唱へることも、念ずることも、信ずることも同じ救ひの道にしかすぎない。

けれど、こゝに易行道と難行道の根本の相違のあることだけは、はっきりしてをく必要がある。即ち、難行道にあつては、空を知つたとき悟りがある。

しかるに易行道に於ては、反省したときには、佛と人間とは、一體ではあり得ない。我は救はれる衆生であり、佛は我れを救ふ力である。

従つて、そこに感恩があり報謝があらねばならぬ。報謝は、かくて、

- 憶念彌陀佛本願
- 自然即時入必定
- 唯能常稱如來號
- 應報大悲弘誓恩

とのべて龍業の思想を表はしてゐる。

釣の仕方に巧拙があり網のうち方にも上手下手がある。

だがどんな上手な釣人漁夫でも、網に穴があいてをり、釣針に缺陷があつたら魚は捕れぬ。

運命の海に、幸福の魚はつねて游浮してゐる。季節の關係もあるかもしれぬが、とかく捕ふる網の完き準備を必要とする。

人生は鑿石所だ。

それから品性をきり出し、之を彫刻するのが生活だ。とゲーテは云つた。人生を刻むのは、藝術家のみの仕事ではあるまい。人間の生活、——それ自身が彫刻である。

幼げなきものよ。

我は、汝の品性を造つて與へてやる力をもたぬ。お前は、お前自身で、それを造れそれが父の願ひであり訓へである。

餘計なものだ使つてしまへ——  
俺には、お前の命令につねに忠實であつた。かるが故に俺はつねに貧乏である。

一年を十二ヶ月にわかれ、これを三百六十五日とすることは、生活の便宜のためであらう。

それは、生命其自身の内容となるものではない。時は永劫である。

その永劫の時を自己の本質の生命とするのはこの時を自分の力によつて具象化することであらう。

換言すると、一日のうちに十日をあらしめることである。

かくて、八十幾歳まで、乞食をして生きながらへてゐる人が尊い生命の所有者でなく、若くして死んだ入のうちにも本當の長命者があることとなる。

櫻の花の生命は短い。けれど、短い故に花の價値を失はない。吾、たとひ一夜の花であつても、その輝かしい姿に、彼自身の久遠の生命をうち込んでゐる。

磯までは、海女も饗着る時雨かな、人生はおもしろい。

人情は微妙だ。

將來のことは、一大事だ。

子のこともおもになければならぬし、今迄のやうな生活に嫌氣がさしてもゐる。

だが何より重大事は、いまの一念であらう。

桶やバケツは、下から洩れる。財産や煙は、上からもれる。

佐久間象山はいつも鏡をふところに入れ、他人が嘘を云へば、すぐとそれを出して、みせたといふ。ひよつとすると全ての人は、この鏡を懐のうちに藏してゐるかもしれない。

算盤といふものは上の一珠が五の價値をとつてをり、下の五つが夫々の價値をとつてゐる。合せて十となり、これで物の勘定をする。ところが實際上はいちばん下の一珠はこれはいらないものだ。十

になれば上へ上げ、五つになれば五の珠をおろせばいゝのだ。と云つてこれをなくしても計算に不便である。

人生もやはりさうだ。

日々の生活、物を生産したり分配したり、消費したりする日常の經濟生活は九まで、つきてゐるのだ。

ところが、それだけで、人生が完全かといふと一つの珠が残つてゐる。そこに、休息があり、娛樂があり、趣味があり、人情の生活がある。さうしてこれはあらゆる人間の缺くことの出来ないところのものである。

ところがこの一の珠も使ひ方をあやまると、全體の計算を無茶苦茶にして終ふ。

この世界の必要を無視してゐる人と、この一の珠のみに執着して全體の計算をあやまる人とは、共に正しい人生々活ではない。而して、個々の計算に用ひられない不用のこの珠の世界は、一切の人々によつて味はるべき性質のものである。

ところが人生は、複雑で、山にゆきたい、海にゆきたい、さうして疲れを休めたいと思つても、多くの人にはさう思ふ様に出かけられない。

そこで、書や畫といふものも出来てくる。乃至、慰安のためにラヂオや蓄音機も流行してくる、活動寫眞も亦この一つの珠の世界だ。

勿論、人種により、個々の人間によりその趣味はちがつてゐるが……。さうしてこの趣味が低下すれば人間は野卑になり、この生きるもの、恵みを奪はれたとき、人間の情はすすんでゆく。

東洋人は、昔から、静かな世界に魂の庵をむすんでゐた。山を愛し水を愛した。ところが、いかにのんきな昔の人でも、さう簡単に山に入ることは出来ぬ。今登山熱が流行して、山に入る人は多いが、それでも限局されてゐる。徹底して山に這入つたのはおそらく役行者位だらう。

だからせめて、床に山水の繪でもかけて、居ながら山水の境に這入らうと、軸や額が出来て来た。だが昔でもいまの新感覺派以上の文人もゐた。小西來山といふ俳人がその一人だ。來山は藥屋である。商賣がいそがしい。とても山のすきな人だがゆけない。そこでと云つて、床軸でも平凡だ。といふので考へ出したのが、深夜グレート大阪の大厦高樓の街をさまよひ、兩側にそりたつ家並を山と見街道を幽谷とみて、仙境に入つた悦びを感じてゐる。

つてゐる。さうしてそれは「自然」に即してゐるものである。東洋の文字は繪から生れ、その繪は「岩」から發達したのである。人物などは多く老人で、其自然の一景として取扱はれてゐるのである。吾々が此軸を眺めてゐると心自ら清淨域に住する。この清淨域に遊ぶ心持——それはたしかに九九の計算を越えた人生を創造する。これが不要にみへる一の珠の價値のある所である。

△  
講釋師見て來たやうな嘘をつき

講釋師扇で嘘を叩き出し

など、云ふ川柳があるやうに、昔から講釋師はよい加減な嘘を、平氣でついでたのである。ところがこの頃流行する「大衆文藝」にも、ずるぶん突飛な出鱈目がある。さうして、それはむしろ

たのである。のちこの人は

お奉行の名も知らずして年くれぬ

とひねつた句が崇つて追放され、とうとう本望を達して山に遁れたさうだが、今では、書畫が物好きとお金持の道樂となつて終つた。趣味や生活の變化もあらうがその方にも罪がある。

つまり、これも一つの珠のつかひ道をあやまつてゐるのだ。

△

縁がだん／＼濃くなつてゆく。靜かに自然の行衛を觀照したい。のび／＼とした心で自然はさ／＼やく。我等の生命に。

書畫の趣味が絶對的によいといふわけではない。ことに今では、書畫は本來の面目を失うてゐる。だが、あの書畫の持つてゐる味は東洋人の趣味にかな

る講釋師は、師匠からだんだんと受けついだのだから嘘も合理的になつてゐるが、大衆文藝作家となると、思想のうごいてゆくまゝかきなぐる——まさかさうでもあるまいが——のだから嘘がよりひどい。

山岡鐵舟が白髯橋で月を見て感慨にふけつたり（註）白髯橋は鐵舟死して數十年後の大正年間に出來たぼや／＼。

幕末の人物が、洲崎で大喧嘩をしたり「鬼神のお松」の日の出の松吉が父の亡靈をみるところを日本橋の埋立地の中洲にしてみたり等。

だがよんでゐる方では、突飛な變化にとみ、趣向のすべて奇抜なところがおもしろく、喝采を博する。

同様に、挿繪にも、かなりいかげしいものもある。

る。

本文には遊人の扮装を鼠蛇形としてあるのを  
葛西の兄アの「うろこ」形に書いてあるものもある。

これはまア一の文學上のあやまりで、むしろ御  
愛嬌であるが、之が、實際の生活上になると、利害  
に關係するから信用上にも影響してくる。

「何にあいつの云ふことがあてになるものか」と。

朝顔の芽がふいて葉が出た。かうなると、鉢が問  
題？になつてくる。洗面器のふるいのや密柑箱では  
少し辛棒が出来ない。やつぱり鉢らしいものが愆し  
くなる。

鉢をみるのでない以上、何でもよきさうなものだ  
が、そこにやはり趣味といつたものが、さしはさま  
れてくる。

人間が、赤裸で生きて行かない以上、かくし

て衣服はそれ相應に必要な上に趣味化してくる。

而してそれも生きるためには必要だ。同様に禮儀

作法といふのも、一の人間にかくこの出来ない衣裳  
であらう。

雑誌の編輯でも同じこと、見出し一つつけるとこ  
にも苦心があり、組方のうへにも編輯の手がこまれ  
る。植字だつてさうだ。かくて、附随物の衣裳工夫  
が完くして雑誌の文章が光彩をはなつ。

人間の生活に技巧のあることは面白くない。け  
れど衣裳の一つたる「道」をゆくことを忘れること  
は出来ない。

△  
宗教を賣物にしてゐる人があると共に、宗教を  
商品として買つてゐる人がある。

この人たちには、神や佛は、信仰するといふこと

によつて、何かの役に立つ、ひどいになると現實  
の利益が輝く……といふ價値を認めて、買つてゐる  
のである。

△  
だが、眞實の宗教は、生命そのもの、上に輝く。

△  
生きるためには、信念といふものが必要である。

一の主義を奉じて、或は一の目的を以て、それを  
完成せんとするには、その主義に對する忠實な  
信念がなくては、なし遂げるとは困難である。だ  
が、その信念と宗教的信仰とは全同ではあり得な  
い。

△  
唯物論的な立場に立つてゐる人は、多く宗教  
を否定してゐる。

△  
だが、生命に即する眞實の宗教は、如何なる人も

之を否定する權能をもたぬ。

殿堂が宗教でもなければ、況んやその教團の組織  
制度などが宗教ではあり得ない。

眞實の宗教は「無我」「自然」「無義」といふ生  
命の本質に樹立さるべきものである。

而してこの世界は又、安價な唯物論を以てしても  
説明しつくされるものでない。

△  
花の美しさ、藝術の尊嚴、ありがたい感激——は  
全て人間の思索と説明とを超越したものである。

△  
もちろん信仰に「解信」といふのがある。知識を  
すゝめてゆくことによつて信を獲るものである。

△  
他方の信仰は「仰いで信ずる」が究竟に於て、  
如實の世界は説明を超えたところにある。

仰いで信ずるとは、絶対者の如來を信ずるのである。その如來とは、慈悲と智慧とを具足する無碍自在人である。けれど如來とは、吾をはなれた存在ではあり得ない。

その國土は、吾れと俱に所有し、吾と共に莊嚴し、佛と衆生とが一体になることによつて「成就」をなすところの世界なのである。

光りがあつて闇がある。理想があつて缺陷が認められる。自在の如來の光明によつて、地上の暗黒が認知される。而してこの世界は、一切のものゝ上に顯現する。而してその作用は無爲の爲である。

日本人は、摸倣性を有するが獨創力がないと攻撃され日本人自らもさう思つてゐるが、摸倣性はなべ

て人類の天稟で、之れが動くところに自ら文化の發展があり個性の伸長がある。

西洋でもローマはギリシヤに、佛蘭西や獨逸はローマに摸倣して出來た文化ではないか。

それにくらべると、日本人は昔から外國の文化を摸倣しても、ちゃんとそれを自分のものとしてゐる。

民族特有の文化を形成してゐる。

儒教でも、佛教でも、支那や朝鮮から受けついで

まゝのものではない。

みんな材料は輸入したが、加工し洗練し、独自の個性を發揮したものに創り上げてゐる。

八景は、支那のそれにならつたものかも知れないが、日本の近江八景は依然日本の近江八景で支那のそれではないのである。

洒落といふ世界も、人生の重要な一面である。

いやに感傷的に考へたり、おこりつぽかつたり、愚痴や不平で物事をみる灰色の眞實よりも、洒脱のこたはりない軽い笑ひの世界は、はるかに尊い。

日本人は、昔は多くこの軽い笑ひの一面をもつてゐた。それが近代にいたつて笑ひの世界が下品になり高尚な生活から消えていつた。

下品な笑ひはつゝしむべきとだ、けれど眞實の世界も又笑ひにあることを知らねばならぬ。

厭世教だといはれてゐる佛教でも、本來の面目はこたばりのない笑ひにある。

苦行六年の後の佛陀の生活は笑ひから初まる。

少々よいことをしたつて、世の中の問題にはなら

ぬ、否ともすると、疑はれたり誤解されたりするところが多い。

ところが、悪い方のことは、無條件でうけ入れられ、事實以上に宣傳されたり噂をされたりする。

日本人は、櫻の花をめづると共に、初夏の情趣に限りない憧れをもつて居る。昔からの繪巻物も多くこのごろを背景にしてゐる。

世界の民族でこれほどこのごろの景趣になつかしみをもつものはない。

之はおそらく美しい山水にとりまかれてゐるためであらうが、又何となく民族性にも合致するためであらう。

運勢——そんな馬鹿なことがあるものか？ 勿論

人間は半分力で半分は運命に支配されるものである。それはどうすることも出来ないが、その運勢がちやんときまつてゐて豫知されるといふ様なことは昔の迷信である。そんなことが豫知されるなら、第一、あんな風をした占者の存在からして、おかしな話ではないか。ぐんぐんと豫知して立身出世をすればいゝ。……

など、平生は、無頓着でゐても何か事件がおこるそれが偶然みな自分の運勢と一致する……と云ふ様なことになる、とたとへやつげり頭では、そんな馬鹿なことが、と否定してゐても妙に氣にかゝるものである。

人間の心は理性に従うてゐる様で、案外、感情にもろいものだ。

去る日、大藏省で、平将門の慰霊祭といふものが

神官の手で、はなぐしく行はれた。その動機といふものは、復興整理のために、省内にあつた平将門を祀つた祠を、すげなくとりこはして他にうつして終つた、ところが、それからは、省内に、病人がたへない、そこで、誰れいふとなく、それは将門の祟りだといふことになつて来ておぢけがついた。

かくて、盛大に靈を祀りかへして轉禍しようと、いふことになつたのださうである。

勿論これは、新聞屋さんの、興味本位の見方で、大藏省では、古い祠をとりこはしては……といふことから復興したまでにはかすぎないが、どうもかなりすぐれた文化人であり乍らかうした所に一の魔力——若くはそれに似た、感情や崇りをおそれる観念を意外に捨てきつてゐない。

だから、堂々たる帝都にも、迷信がはびこる。迷信といつても、それがいゝことならば、そんなに排すべきこともなからう。「近星といつて、お

月さまに、星が近くあると火早い」といふ様な俗信の様なもの、空氣が乾燥してゐたりなどする關係からの永い經驗からわり出されたかどうかは知らぬが、これによつて、火の用心をすることが出来るならそんなに、除かなくてもよからう、しかし感情は、一の流れである。一の迷信をもつてゐる人は、全ての他の迷信をも易い。

こゝに出来るだけ、その妄心や迷信をなくする必要がある。

△  
余り遠くない過古にも清貧を禮讚してゐた時代があつた。

粗衣粗食に晏如として、無慾な仙人のやうな生活をしてゐる人を、高潔な士だ、偉い人だと、人々はこれを敬し崇めた。

ところが、まつたのない時代は遠慮なくすゝんでしまつて、いまやどこかのはての無人島にかうした人をおき忘れてしまつた。

どんな所に於ても又いかなる事情があつても貧乏はもはや自慢ではない。

洒落半分や風流儀で、貧乏の集で腕まくらに晝寝してゐることは、許されぬことである。昔は貧乏に安じてゐても生活は出来たが、いまでは「安んずる」生活は、即ち、餓死に接してゐるそれとなつたのである。

而て人の血をしぼつてつくる金持の行爲が不徳であるやうに、働くことを怠けて貧に安じてゐること

も同様に不徳である、ことになった。

「働かざるものはくふ可らず」

これが現在のスローガン（ときの聲）である、さうしてそれはしかるべきことだ。

働かないで、貧に安ずるといふ思想は金をつくつて遊んでゐる人間と共に、人生から放逐されるべきであらう。

といつて、働くところに、たとへばパンはあつてもすぐに安樂はない。否、働きうる足場をみつければとがかなりむづかしくなつてきてゐる。厄介な時代だ。しかしその人生への勇猛な突進こそ、生きる本當の力であらう。

消極的な節約即ち「無くてすます」欲望をむりにおさへて節約するといふこともたしかに必要なこと

にちがひない、けれど吾々は、更に有効に凡てのものを消費することもわすれることは出来ない。

「無くて我慢してをく」といふやり方はどうかすると餘裕が出来たときに反動をおこし易い。

だからもつと、「物を愛する」といふ趣旨から、物を永く使用し物の効力を保つやうにしたい。

毛織物の輸入が多いと云つて之を氣にするよりも三年の壽命は五年に保つやうな態度でありたい。

生活とは働くことである。働くことなしに生活はない。而てそこに如實の生活がある。

馬乗りの上手は鞍上人なく、鞍下馬なしの境に達してゐる。

人か馬か、馬か人か其區別がないほど、一致合體してゐるところに極致がある。之は仕事にとつても

同様である。

彼は正義の國のあることを信じてゐた。濁つた國々を放浪しつゝもいつか正義の國に辿りつくことを疑はなかつた。併しある大學者をたづねて、地圖をみせてもらひそのありかを何處かとすみ／＼までさがしたけれ共どこにもみあたらなかつた。彼が生活を否定したのは、それからのことである。地上は汚濁にみちてゐる凡夫の境界だ。だがそこに救ひと正しき道が天から輝く。

吾々は、自分を、本當に知らない國民である。自分のうちに、たとひ偉大なものをもつてゐても、自分でその尊さを知らない。他人が尊重し出すと初めて、さうかなと、知る様な人種である。だから、

支那にかぶれ、西洋にかぶれて來た。

自分を選民よばりする必要はないけれども、小くとも、たへざる批判は、なされねばならぬ。

生水をのんではいけないとは、つい近頃までの一般の衛生思想の則であつた。頭を使ふ人間は、好んで肉食しなければならぬと文明思想はつけた。

處が今日は、生水の禮讚者が出來て來た。食物もむしろ少ない方がいゝといふので一食主義を奉じてびち／＼やつてゐる人もある。外國でも菜食主義が流行しだした。

そんなものかなと、今更あはて出してゐるのが日本人である。

新しい學問を應用することは必要である。けれど、在來のもの、價値もそれと同時に考へてみねばならぬ。



昔から少くとも東洋では粗衣粗食をした人間から偉大な人物が多く生れ、聖者といはれた人達はみんな、戒律を守つてゐた。高僧は、午後は、食事をとらないのが、その掟でもあつたのである。而して、それは、ながい習慣や経験から來た洗練されたところの掟であつたのである。

即ち、こゝに、さうする理由があつたのである。時がかわり、世がうつれば、自然と生活様式は變つてくる。従つて、昔通りにはゆかない。

ゆかないけれども、新しいものをとり入れるためには、今迄のものを、一應整理してかたづけける必要はあらう。

新進の藝術家を以て任じてゐる人に日本畫の無價値論を主張してゐる人があつた。

ところが、本家の西洋で、東洋の美術ことに日本

繪の作風がとり入れられる様になつた。法隆寺の壁畫は、まぢがひもないテンペラ畫であることがわかつた。

この新進作家は、いつか、日本畫のうへに洋風の繪畫をあらはすことを主義とすることに、忽ち變つた。

吾々は今少し、うちにもつ自分の力の尊さを知りたいものだ。

昔は「學」がなくとも生きてゆかれた。「詩を作るより田を作れ」とさへ誡められた。まこと田園それ自らの生活のうへに歌があり詩があり、自らの生活が樂しめ、指物師は師匠から習ひためた腕と尺物さへあれば、文盲でも充分であつた。しかし世がすゝむにつれ學問がとかく必要になつて來た。じつと

うちに居る主婦さへ「學」がなくてはつとまりにくいこと、なつた。土に親しむ農夫にも「學」はもとより必要となつた。

然しそんな時代も、もう遠くすぎ去つて、今では「學」があつても生きる糧とはなり得ない時となつた、みんなが「學」をおさめて來たからである。かうなると次に來る時代は「學」があるから食つてゆかれぬ時代であらう。

この豫想は、余りに皮肉でありすぎるかも知れない。だがこの頃の世相を見てゐるとそろ／＼そんな時代が既にきか／＼つてゐる、生半着な「學問」を首にかけて、樂しく暮さうと教育を受けた人々が「俺はなぜ學校なんぞに入つたのあらう」と、失業の苦しさから洩らす嘆聲が、文明の都の底からうめ

き聲のやうに聞えてくるのは、幻覺でなく悔ましい現實の事實である。

學問をすてちや闇になる。といつておぼえた知識は生活の糧にはならぬ。たゞ心のうちを照らす「微光」である。

うちに輝く光りをふりがざして、吾等のこの退ましい腕をうちふるふ。

そののみが唯一の生きる力である。生じつかな「學」にたよると、はてとなつたとき……「學」があるから困ること、なつてくる。

世の中の人間は、とにかく食つてゐる。生きてゐる。餓死する人は聖代の今日、飢饉に處しても有り

得がたい。

然し「眞面目にさへやつてゆけばどこでもくつてゆける」といふ結論をこゝから導き出すのは少くとも冒險な企てであらう。

黄ろい聲をあげて祈る。聲うちふるはせて念佛を稱へる。

而て法悦といふものは、人に罪をわざとみせびらかす告白である。……といふ風に考へて、安つばい感激を信仰の極致だとしてゐる人が救はれたと自信してゐるなかに多い。しかしそれは、若い子女の安價な涙をそゝる軟文學が、文學の本質だと考へてゐる人間と同じ程度のお目出度さである。そんなものは「金剛不壞」の信と距ること遠しである。補正成一喝をくらはすほど太い信念こそ望ましい。

いところの……

「虎狼仁あり、父子相食らはず」

とはたしか老子の言である。獐猛な虎でさへ子をくはない。否、あの百獸の王としておそれられてゐる獅子の子を愛する情は、人間にまさつてゐるかも知れない。然しそれは本能の力だ。

親にすまない。妻子にすまないと思ふは人間の本能である。同じ本能としては、その點に於て獅子や虎の心とかはりはあるまい。すまない心を、すむようにする、こゝに「人間の生活」がある。

とつぷりと日はくれてゐた。河岸の街の家々には夕餉の聲がまどろかである。川風がさらさらと流れてくる。

愚痴や不平をこぼす人間に限つて、いくら順境なときに巡りあたつても自信をもつて開拓してゆく力をかいてゐる。つまり愚痴つばいといふことは、力のないしるしであり心の病である。

二十四孝が行つた奇蹟は、どうかして親の心を安めたいといふ一念が、つねに「行」の上に、思ふよりさきに顯はれてゐるところに存してゐる。

雪のふる冬の日に筍はありえない。がありえないことを考へる前に探してゆく心ばえが、奇蹟となつて顯はれてゐるのである。眞實の生活といふのはこゝだらう。親をなかしてすまないと頭をさげてゐることも妙だが、親の顔には、えみを與へること更に妙であらう。然しこの間には飛びこえなければならぬ深い大きな溝がある。ないてゐては、わたれな

處があるうすぐらい電柱のもとでひとりの少年が、おそる／＼家のなかを覗いてはしく／＼ないてゐた。「どうしたの」とたずねると、しやくりなきしながら、帽子を風にさらはれて川のなかにおとしたといふ。主人にしかられるのをおそれてゐるのだ。それからつれていつて新しいのをかかつてやつたら、よるこんで賑つていつた。

この少年にとつては、もうふるくなつた帽子ひとつが、家にかへれないまでに大切である、ふる靴を代價にすれば、僅か二、三十錢である、けれどそれをなくしたらその人間にとつては、忽ち十圓ちかくの價となる。

物象のみに使役されてゐる俗人は五感の刺戟以外に何等の活動も、ため。

無爲徒食が、その理想である。精神的不具者でなく、何であらう。

達磨さんには、手もない、足もない。だが、いくらころんでもすぐおきあがる。

「ふん、いばりやがつて、うぬが人間なら、俺も人間だ。」

心のなかで、暗嘩を買ひ乍ら、行き違ふのが、現代の個性文化の相だ。「カルメ糖」のようにふくれあがつてゐるのだ。

己れの存在を主張するためには、他人の存在を許すべきだ。他人の存在を確認してこそ初めて、己の存在が許されるべきである。他人の存在を許すことは即ち他人を敬愛することだ。かくて、共存の世界に

於ては「我儘」は、通らない。愛と愛とを以て「合掌」の共存世界を具現する。これが新文化の基調だらう。

「日進月歩」のまぬるい時代はとうにすぎ去つた。文字通りの、刹那の回轉である。一寸、ふりむいてゐる間に、舞臺はがらりとうちがはつて終ふ。

人間は、本来平等であり、生れたときから、差別のあるのは、うそだらう。

だが、事實上吾人が持つ不平等な遺傳も、環境も或る意味に於て、もつて生れた一の宿命である。どんな社會だつて、おそらくそれをとりのぞくことは出来まい。併し、生れ乍らに不平等であるが故に、この宿命的な力を、自由と平等と幸福の「あ

るべき」本来の世界に、洗練してゆく機能が講ぜられねばならぬ、國で云へば、政治の要諦はこゝにあるのであり、個人でいへば勸行精進の努力生活がゐることとなる。

いたづらに宿命にすねたり、主我的偏見を以て所論することは、つゝしむべきことだ。

「網」は魚をとる「殺生道具」ではある。けれど、極樂淨土では、これが羅網、寶網となつて、國土を莊嚴してゐる。

「かうした人々は、別々の國に召されて行つたのであらうか……」。

彼の子供は、ふと考へたのであつた。そこには、十字架に祈りつゝなくなつた人。法華に凝つた題目の

行者、乃至しとやかにお念佛を稱へて往生した人などの墳墓が、うち並んで靜かに沈黙をつゞけてゐるのであつた。いつしよに、他國に住してゐるやうな氣もする、別々の國にゆくべきもの、やうな氣もする。死んだら全てはなくなるといふやうにも考へられる。子供はいろ／＼と考へたが、所詮彼には、何物もわからなかつた。

自分が、親に孝をつくすこと、彼が、彼の親に孝をつくすこと、どこに變りがあるだらうか、またどこにははらないところがあるだらうか。彼の親は彼の親で、自分の親ではない。自分の親もまた彼の親でなく、彼からみれば他人である。更に自己と彼とも勿論ちがふし、孝行のつくし方も、全然同じではない。

「孝」といふものは、彼のみにも、自分のみにも専有されぬ「或るもの」であらう。

キリストの最後は、悲痛なものであつた。釋迦の入滅は、寂靜そのものであつた。しかもキリストの眸は、西歐の文明をうみ、釋迦の涅槃の瞑想は、佛教文化を展開し、今現に猶共に生きつゝある。

動いてゐるものが必ずしも生きてゐるものではない。静止してゐるものが必ずしも死んでゐるものではない。

「眞實」そのみが生命であり、力である。

氷は、いくら熱をそゝいでも、全てが溶けるまでは、温度が昇らない。

「働かねばならぬだらう」と考へては眩いてゐる。

おきるよりも、寝てゐる方が樂かも知れない。けれど、ゆら／＼と美しい陽の野にゆら／＼春の朝の悦びは、朝寢してゐるころには、わからない。

頭で考へて生れるものは一の概念である。眞實の生きた智慧は、「行」即ち歩みによつて具現する。

人間は、未成品である。理想の光りのメスによつて、完成へと努力精進する——それが人間生活である。

言ひかへると、念々の「行」の歩みのうちに、完成の影を刻んでゆくのである。

地獄の底から、佛への歩み——其歩みゆく旅の相が人間それ自らである。

人に高慢と偏狭の塊がある限り、いくら「光」をそゝいでも、生ずるものは零度の水である。いや、人間の心の塊は弱い火ではとけぬだけ厄介である。

龍樹の「易行品」に地獄におちた人間は、反省と向上をもたないで、自分の獨斷的な塔にとちこもり眠つてゐる幸福さうな人間よりも、幸だといふ意味の言葉がある。

地獄はどん底の世界ではある。だがどん底の苦をなめた不幸は、新しい更轉の可能力を與へる。

「神は、愛するものゝために苦を與へたまふ」といふ、聖書の語と共に意味ぶかい。

コンチャロフの作オプロモの主人公は、床のなかに、ねむつてばかりゐる。そして「人間は、な

この自覺を置いて眞實の幸福はあり得ない。

頭で考へてゐる人には、永久に救ひはない。そこにはたゞ、ゆくりなき疑惑と焦燥と不安がある。どんな苦にでも魂をぶちこんで終へば、自らその苦のなかに救ひが成じる。

高原の陸地には、蓮の花はさかない。神さまはつねに、苦といつしよに存すといつた方が眞實であらう。

古聖はうたつた。

「煩惱功德の体となる

氷と水の如くして

氷多きに水多し

障多きに徳多し」と。

生物學者は教へる。

「人間は、動物だ」——と。

神學者は誠す。

「人間は、神の子だ」——と。

はて、「俺は」？……

煩惱の稠林に住む動物、その動物が苦を背負ひつゝ、神の園に、廻りゆく。それが本當の自分ではないだらうか？

其旅には、荷物はない方がよい。けれど路金は、どつさりあつた方がいゝ。生きるための苦……それは路金である。「全ての経験は尊い」といふのも、「苦辛をなめた」といふ路金が都への道中にやくたつからだらう。

ペンキやは、ペンキやでいゝ。たゞ専念にその道を精進すればいゝ、ペンキを使ふから畫家になりうるといふことは、自己能力に對する誤認であらう。同様に少し位社會の苦患をなめたからといつて、人生をはつきりと知りぬいた藝術家や名僧知識の域に這つたやうに思量することも迷想である。自分の能力に對する誤つた希望を早く悟つた人はそれだけ幸福だ。

嘘を云へば、舌をぬかれるぞ、といふ様な調子で閻魔さんは、恐ろしいものにされてゐる。あの形相からいつてもさうだ。

その閻魔さんのところへ、お怒を蒙らない様に

詩や歌や……廣く云へば、藝術は、傑作でなくては有してはならないものである。藝術の國に、醜いもの、存在することは、その尊さを汚すことである。その意味に於て、藝術は、貴族のみの王國である。従つて傑れたものを出す素質のないものは、それに対する誘惑を面真目に自分に、警戒すべきであらう。こゝに宗教と、藝術とは差違がある。

宗教は、全てのものに味へるものでなくてはならぬが藝術は、その眞實を如實に表はしうる天才的なものによりて創作される。觀照と、創作とはそこでは一致してゐない。

ところが、人間には模倣といふ誘惑と自惚があつて、名曲をきくと、直に作曲家になりたいと思つたり、演奏を稽古したりする。さうして聽ては自己魔酔にかゝつて、自分でも何かやれさうに思へる。

御機嫌取りにゆくかどうか知らないが、正月の十六日と、お盆の十六日に、おまゐりをする風習が諸方にある。

東京でも、昔は、百閻魔と稱して、たくさん閻魔王を祓つたお寺があつたが、だんく少くなり、震災前に四十何ヶ所となつてゐたのが、その後更になくなつた。

有名な閻魔大王の像もやけて、大抵は掛軸になつてゐる。

閻魔王の姿は、緒ら顔で、憤怒の相をあらはし、地獄の入口で、罪人を裁くものだとして一般に考へられてゐる。

うそをついた奴には、百雷が一時におちた様な聲でどなりちらすとも云はれてゐる。

ところが、實際の閻魔王は、父親のやうな愛をたへてゐるので、印度の閻魔王は、觀音のやうにやさしいお貌である。

それが日本に来て、いろ／＼と變化させられて、徳川時代の申頃、人々が一般に、こはいものをよるこぶ様になつた。お化屋敷だとか、幽霊だとか、怪談だとか——さういうことを、おそれつゝよろこんだものだ。

その變態的な嗜好に投じて、いつのまにか閻魔さんも、あゝいふおそろしい鬼の親分のやうなものにされて終つたのである。

閻魔王は、さぞや、親心が子の心に徹しないさびしさを、あの形相のうちに、しみ／＼と感じてゐることであらう。

閻魔王の像がおそろしいものでも、それはさしつ

女と、女の子にあひ許しあつてくれとたのんだ。けれど、その妻はなか／＼赦さない。赦すほどの大きな愛の力をもつてゐなかつた彼女には、赦すことが出来ない。男は赦されないうゝ寂しい心を抱いて死んでいつた。

然し、夫が死んだあと、日数がたつに従うて妻の心には、徐々に大きな愛がわいて來た。生きてゐるものに對してもつてゐた憎みは、その人の死によつて徐々に消されて行つた。かなりそれからたつたときである。夫の墓前でめぐりあつた。

いちらしい女の子の眼は、たうとう彼女に全てを赦させた。彼女は、手を握りあつて夫も女もその間の子も赦した。今迄彼女の心に蒸暑く押被つさつてゐた或る物は、此時姿をたつて朗かな秋の空のやうな、静かな歡びがさつと女の心に流れて來た。

かへない。しかしそこに父の嚴たる怒れる裡にやるせない親の念願の燃えてゐることを感知したい。正邪善惡を訓へ、報恩の觀念を教へる——そこに閻魔の眞實の精神がある。

ザイツエフのかいたものに、「死」といふのがあつた。妻も子もあつたが、ふとしたことから或る女と關係してその間に子がうまれた。

ところがその男はまもなく病床につき、恢復の見込がなくなつた。死がだん／＼とおしせまつてくる。男の心にはしみ／＼と、自分の過去の間違ひと、罪の觀念が、味は、れてくるのであつた。自分の妻にも、或る女にも申しわけがない悔恨の念が、ちくり／＼と胸をさすのであつた。たうとう其男は、たへられないで自分の妻に赦を乞ひ、さうして

原作の文學上に關することはこゝに問題にせぬ。ひよつとしたら筋もこの説明も、原作のテーマとはちがつてくるかもしれぬ。しかし、それはどうでもいゝ。

「死」は、究極の平和であり究極の愛である。即ち生の完成である。

けれど「死」とは肉體上、生理上の死ではない。生きようとして生きることの出来ない、罪からのがれやうとして逃れることの出来ない——この眞實の願求のうへに、響く一の調和の世界である。だが勿論それはごまかしではない。

道路の大樹は鬮々と繁つたその枝葉を、ゆくりなく生ひ伸ばしてゐます。すがすがしい／＼んでゐたやうな風がさら／＼とその影に流れてゐます。

焼きつくやうな野道を旅して来た人々はその樹蔭に腰をおろしてほつと息をつき休息してゆきます。彼の人達にとつてはそれは疲勞を癒やすオアシスなのでありませう。しかし大樹はかこつのであつた。人間ほど恩知らずのものはない。實に我儘勝手な無慈悲なものだ。日毎かうして多くの旅人がこの樹蔭に休んではいづくともなく立ち去つてゆくが一言だつておれいを云つたためしはありやしない。ひどひ奴になると行きがけの駄賃に枝をへしをつてさへゆく、と。

美いちゃんは村の端れにくると急に泣き出ししました。「どうしたの?……」とかけよつて尋ねると、餘計しゃくりなきます。美いちゃんは、それから街へお使に行くのでした。お友達がみんな「お盆」

たの樂しく、らしてゐるのか知ら? 「お盆」の夕、同じやうに青い空に、お星さまがきらめいてゐます。じつとその空をみてゐると夢のやうに美いちゃんのことが浮んで來ました。

あの蒼いお星様へ、  
こんやはうるんで見えます  
美いちゃん  
幸にめぐまれてあれ!

海……

おろんおろんと  
海がなる

の夜で、たのしさうに遊んでゐるのをみると、こんな夕暮山道をこえてお使ひにゆかねばならぬ親のない自分が思はず悲しくなつて來たのでした。

「わたし行つてあげるわ、いつしよに」

鎮守の森や山道が恐ろしかつたけれど美いちゃん獨りだつたらどんなにこはいだらうと可哀想になつてついて行つてあげました。美いちゃんは泣いて悦んでくれました。其頃美いちゃんのお父さんは遠くに居られお母さまも他人に雇はれてをられたので、子守にきてゐたのでした。まだ八ツでしたのに。「お父さまが歸つたら、お父さまがへつたら……」其美いちゃんは口癖の様云つてゐました。それからもう二年になります。私はまもなくこの街に來ましたが、今ごろは美いちゃんはどんなにしてゐるか知ら? やつぱり子守か? お父さまやお母さまと

際ない

遠つ

海がなる

永劫に秘めたる

しのび音か

呪ひか

生の

祈り聲か

おろんおろんと

海がなる

夏の疾風に

海がなる

不許復製

昭和四年十月一日印刷  
昭和四年十月十日發行

發行所

刑

務

協

會

東京市麴町區日比谷町一

電話 三三四四番  
三三八二番  
三〇五九番  
振替口座 東京二五九番

編輯者兼  
發行所

東京市麴町區日比谷町一  
住 江 敬 義

印刷所

東京府南葛飾郡南綾瀨町小菅三六  
刑務協會印刷部

印刷者

竹 田 益 平

# 人のかがやき第一編

(終)



人のかがやき第一編

不刊書集

昭和四年十月一日印刷  
昭和四年十月十日發行

發行所

研

究

會

會

東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

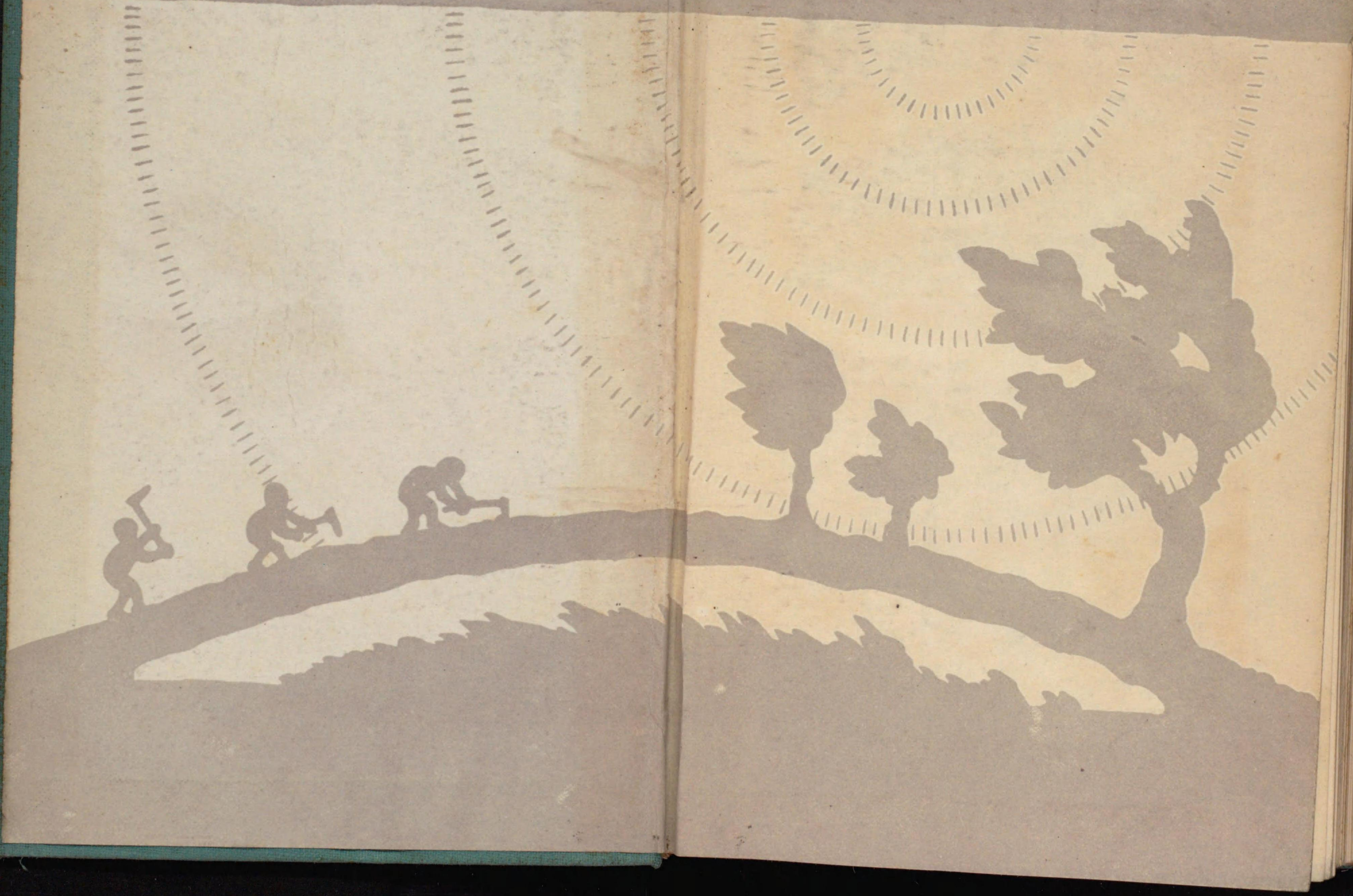
東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

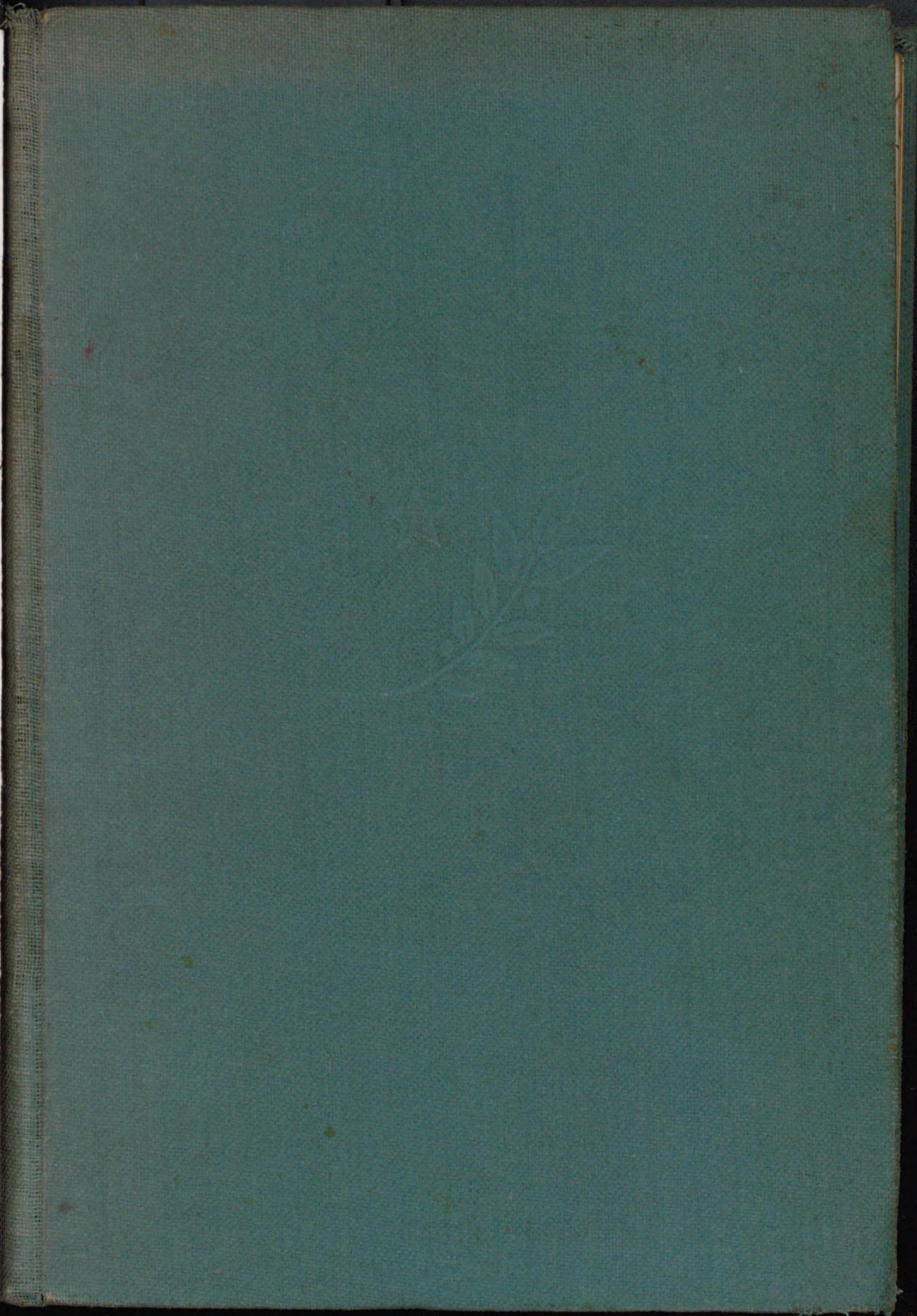
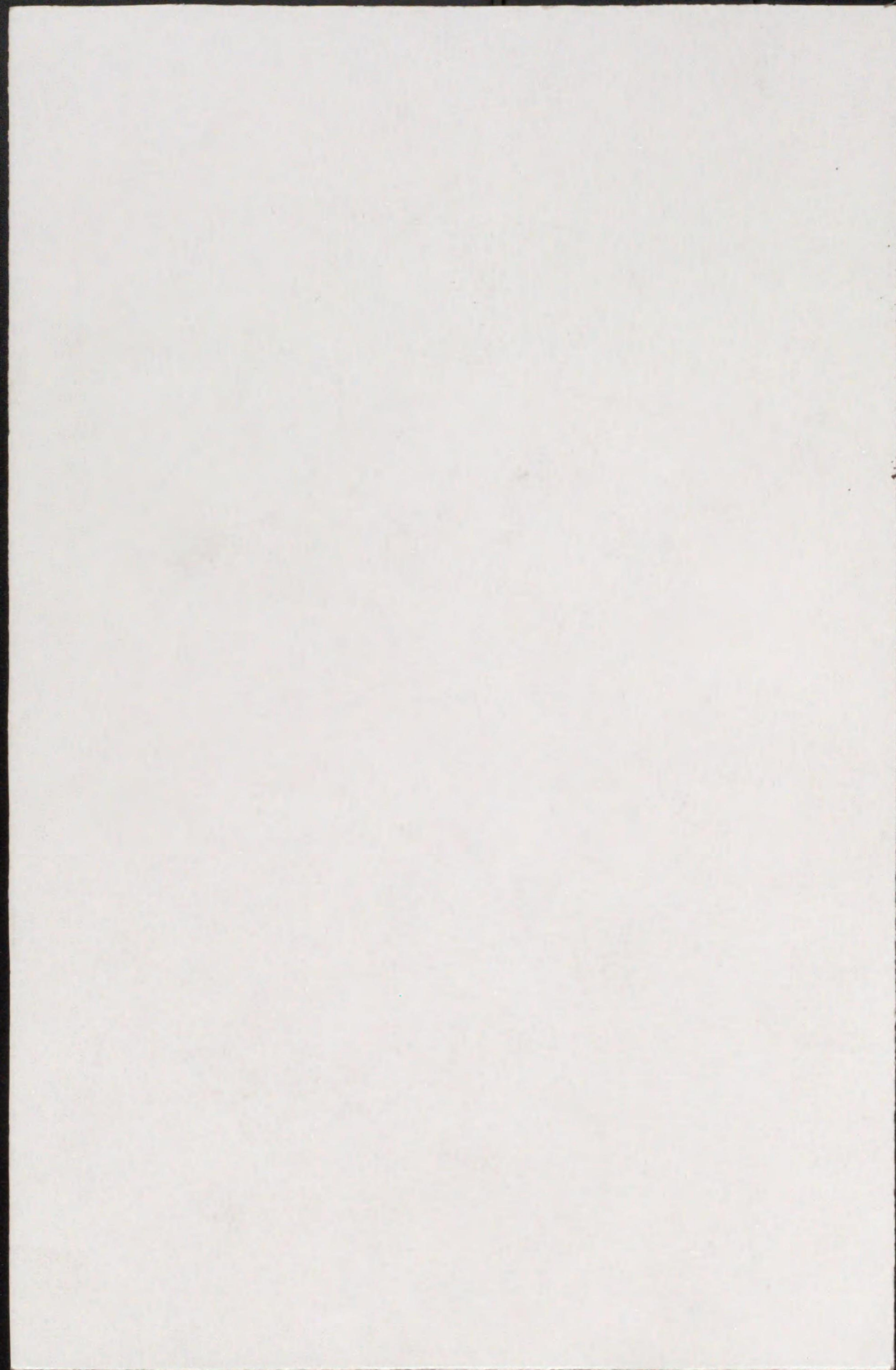
東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

東京市豊島区日比谷一丁目一  
番地

(株)

595  
103



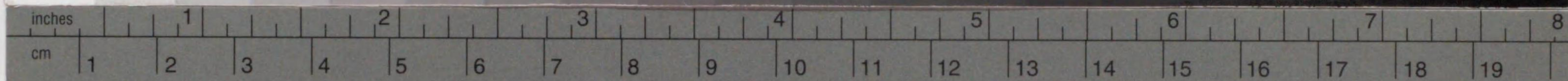
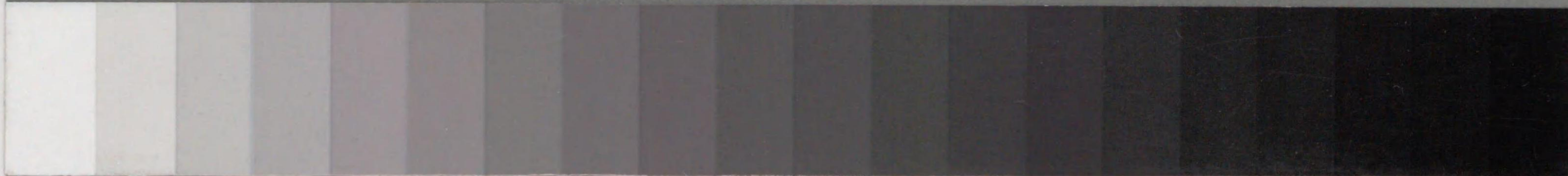


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

